

塚原古墳群 1

大野城市教育委員会



図 1

塚原古墳群は、牛頸の平野神社から、県道板付・牛頸・筑紫野線を春日市の方向に200mほど行ったところにあります。発掘調査は昭和62年にはじまり、途中で何度かの中断はありましたが、平成4年10月現在も続けられています。これまでの調査の結果、古墳23基、小石室（一人がやっと入れるくらいの小さな石室を持つ古墳）9基などが見つかりました。広い遺跡ですので、今後何回かに



図 2

に分けて解説シートを発行していく予定です。まず今回は、昭和62年に調査した中から、いくつかご紹介します。

図1は、塚原古墳群を空から撮影したものです。すべての古墳が円形をしています。このような形の古墳を円墳まへんぼんといいます。図2は、やや低い位置から撮影したものです。この写真でわかるように、塚原古墳群は現代の水田の下からあらわれた遺跡です。



図 3



図 4

図3は、5号墳と名付けた古墳の石室の様子です。手前の、柱状の石を左右に1本ずつ立ててある部分が入口で、その向こう側が死者をほうむった内部です。内部の長さは2.2m、奥側の幅1.2m、入口側の幅が0.9mありました。高さは1mほどですが、本来はもう少し高く、天井にあたる大きな石が何枚かのせてあったはずですが、この石室は、内部と入口の間に段があり、内部の方が低くなっています。こういうつくりの石室をたてあなげいよこぐちしきせきしつ竪穴系横口式石室といい、以前この解説シートでご紹介したどうもと胴ノ元古墳(考古No.7)の横穴式石室よりも古い形のものです。

石室内部から鉄製の刀とやじりが出土しましたが、図4は刀が出土した時の様子です。長さが1mほどで、さびてはいましたが全体の形はきれいに残っていました。床面にいくつかの小石が残っていますが、これはもともとは床一面にしきつめられていたものです。

図5～7は、周溝(古墳の周囲に掘りめぐらされた溝)から出土した土器です。図5は5号墳のもので、土師器のわん碗とかめ甕、図6は3号墳のもので土師器の碗と須恵器はそうのはら皿、図7は1号墳で土師器の壺と須恵器つぎふたの杯蓋です。いずれの土器もたいへん丁寧に作られており、古墳にほうむられた死者のためのおまつりに使われたものと思われます。この中のいくつかは、展示室の「塚原古墳群」のコーナーにありますので、ぜひ一度、実物をご覧になってください。



図 5



図 6



図 7